

【論文】

日本人大学生の行動の道徳的判断と関係流動性・ 文化的自己観の関係に関する研究¹⁾

Moral judgement, relationship mobility and
cultural self among Japanese university students

伊 坂 裕 子
ISAKA Hiroko

目次

要旨

1. 問題

- (1) 道徳観についての文化的影響に関する研究
 - ① 道徳的判断の発達の普遍性に関する理論
 - ② 道徳的判断における普遍性への疑問
 - ③ 道徳的判断における文化的影響を考慮した理論
 - ④ 素朴道徳観における文化的影響
- (2) 道徳観に影響を与える文化的影響
 - ① 文化的自己観
 - ② 関係流動性
- (3) 本研究の目的と仮説

2. 方法

- (1) 調査対象者
- (2) 調査内容
 - ① 道徳観に関する質問
 - ② 使用した行動の特徴に関する質問
 - ③ 文化的自己観
 - ④ 関係流動性
 - ⑤ 食後の時間・空腹の程度・心を落ち着かせる食べ物
- (3) 手続き

3. 結果

- (1) 各行動の道徳性判断
- (2) 使用した行動の特徴判定
- (3) 関係流動性と文化的自己観

- (4) 関係流動性と各行動の道徳的判断
- (5) 文化的自己観と各行動の道徳的判断

4. 考察

- (1) 道徳観の文化的影響について
- (2) 日本人大学生の道徳観の特徴について
- (3) 関係流動性・文化的自己観と道徳観
- (4) まとめと今後の課題

引用文献

Abstract

付表

(要旨)

近年の道徳性や道徳的判断の研究では、人々が一般に持つ「道徳は何か」という信念についても、文化の影響を受けると指摘されている。本研究では、人々が日常的に使用する「道徳」の「素朴」概念について調査をした Buchtel et al. (2015) の追試を実施した。彼らは、「不道徳」と考えられる行動の自由記述から選択した 28 項目の行動について、中国と西洋（オーストラリア、カナダ）で「不道徳」、「悪いことであるが不道徳というわけではない」、「悪いことではない」の 3 つのカテゴリーのどれかに分類させた。本研究では、それに加えて、関係流動性や文化的自己観についての質問紙を実施した。その結果、Buchtel et al. (2015) が指摘するように、相互協調的自己観や儒教的価値観に根ざした道徳観が日本でもみられること、加えて、日本社会の中で、関係流動性を高く認識する人は、道徳意識が高いことが示されると同時に、相互協調的自己観を背景にした道徳観が形成されている可能性も考えられた。

1. 問題

(1) 道徳観についての文化的影響に関する研究

① 道徳的判断の発達の普遍性に関する理論
道徳観や道徳的判断は人類に共通の普遍的なものであるのか、あるいは、文化によって異なるのか。道徳的判断における文化的影響に関しては、多くの研究が行われてきた。初期には、道徳的判断は普遍的なものであるという理論が主流であった。たとえば、Kohlberg (1971) の道徳的判断についての研究では、Piaget (1932) の知的発達理論を背景に、道徳的判断には認知的発達が必要であると、道徳的判断における 3 水準 6 段階の発達を示した。彼は、調査対象者に対し道

徳的葛藤場面を含むシナリオを示し、主人公がどうすべきであったか、その理由も含めて問うという方法を使用して、その回答から道徳的判断の段階を推定した。たとえば、ハインツの葛藤とは次のようなものである。「重病で死が迫っている女性がいる。彼女の病気に効果がありそうな新薬が開発されたが、その薬は 200 ドルで製造できるが、2000 ドルで売られていた。女性の夫ハインツは、借金をして 1000 ドル集めることができたが、それは売値の半分に過ぎない。そこで、安く売ってくれるか、足りない分は後払いできないかと新薬の開発者に頼んだ。しかし、新薬の開発者は、それを断った。絶望したハインツはその薬を盗んだ。ハインツは、その薬を盗むべきだったか、盗まないべきだったか、それ

はなぜか？」というようなものだった。

このような、道徳的葛藤場面において、道徳的判断の初期の「前慣習的水準」では、罰を避けるためなど、外的な圧力によって道徳的判断が行われる。たとえば、「他人の物を盗むのは悪いこと。盗むと叱られるから」などである。中間の「慣習的水準」では、所属するコミュニティにおいて求められている对人的義務を果たすために、道徳的判断が行われる。その範囲内で法律に違反しないことは重視される。そして、最終段階の「脱慣習的水準」では、正義や権利、公平性などの普遍的な概念により道徳的判断がなされる。この場合、もし法律が普遍的原理と一致していない場合は、法律を守ることより正義などの普遍的原理に従うことが正しいと判断される。つまり、この理論では、道徳的判断の発達、文化に共通とされており、正義や権利、公平性などの普遍的な概念により道徳性を判断する段階をもっとも高次のものとしている。

この理論は、1960年代後半から1980年代までの間、道徳心理学や道徳教育の分野で中心的な役割を担っていた（有光・藤澤，2015）。

② 道徳的判断における普遍性への疑問

1980年代に入ると道徳的判断が普遍的であることに疑問が呈されるようになった。たとえば、Gilligan (1982) は、女性は男性と異なる道徳的判断の基準を持っていると主張している。男性は Kohlberg (1971) の提唱しているように権利や正義などの原理によって論理的に道徳性が判断されるのに対し、女性は相手との関係性など文脈による影響を考慮した判断がなされるとした。彼女は、先に示したハインツの葛藤における11歳の男子と女子の回答を例に挙げて説明している。男子（ジェイク）は「命は何物にも代えられないので、ハインツは妻の命を救うために、薬を盗むことは道徳的である」と、Kohlberg (1971) が想定したように命の価値と薬の価

値の間の葛藤を表現し、それを論理的に解決した。それに対し、女子（エイミー）は回答があいまいで、「ハインツが薬を盗むことは道徳的だとは思わない。でも、彼の妻が死ぬべきでもない。盗む以外の方法があるはず…」と答え、なぜ盗んではいけないかという理由として、「薬を盗めば、ハインツは妻の命を救うことができるかもしれない。でも、ハインツが刑務所に入ってしまうと、妻の病気が悪くなるかもしれず、その時にハインツは妻を助けることができない」と答え、所有物やルールということではなく、盗むことが人間関係に与える影響について言及している。さらに「なぜ、妻が死ぬべきではないか」という理由は、「もし、妻が死んだら、妻自身が傷つくだけでなく、多くの人が傷つくから」とした。このようにエイミーは、正義や権利などの普遍的な概念による道徳的判断を行うわけではなく、人間関係に依拠した道徳判断を行っている。この場合、人間関係への影響の違いによって道徳的判断が異なり、異なる状況では異なる判断をするかもしれないと指摘している。このように、Gilligan (1982) は、Kohlberg (1971) の理論が他者からの分離・個別化を前提とした男性的発達観に基づくものであると批判し、道徳判断の普遍性への疑問を呈した。

また、Snarey (1985a,b) は、27の文化で実施された45の Kohlberg (1971) のモデルに従った研究をレビューした。そして、伝統的な部族や農村においてなされた8つの研究全てにおいて、Kohlberg (1971) がもっとも高い発達水準であるとした「脱慣習的水準」が見られなかったことを報告し、都市と地方、あるいは、文化によって、道徳的判断が異なることを示した。これらは、Kohlberg (1971) のモデルのように道徳的判断の発達が文化や集団に共通で、発達によって普遍的原理による道徳的判断に到達すると仮定することに困難があることを示している。

Turiel (1983, 1998) の社会的領域理論においては、社会的慣習と道徳を区別することで、文化の影響を整理した。すなわち、生活習慣やマナーなど社会的慣習は社会によって異なり、状況依存的であるが、道徳的判断は harm (危害) や権利、正義などの普遍的なものに基づくとされる。そして、社会的慣習は社会的強化を通して習得されるもので、社会的権威に依存しているが、道徳は普遍的な原理に基づくので社会的権威から独立しているとされている。Kohlberg (1971) の道徳の発達理論では、道徳と慣習を分化することが発達であると考え、未熟な段階では道徳と慣習を区別することが困難であると考えていた。しかし Kohlberg (1971) の理論では未熟な段階にいるとされる 3 歳児であっても、社会的慣習からの逸脱と道徳からの逸脱を区別できることから、Kohlberg (1971) の発達段階に異議を唱えた。Turiel (1983, 1998) の社会的慣習と道徳判断の区別は、一定の支持を得たが、都市と地方、文化などにより、社会的慣習と道徳判断の区別が異なる知見も発表され (e.g., Ardila-Rey & Killen, 2001)、道徳的判断における文化的影響については、議論が分かれた。たとえば、Ardila-Ray & Killen (2001) は、コロンビアの学校において、社会慣習上の逸脱がある場合には、子供たちは交渉による解決を目指す、他の子をなぐるなど道徳上の逸脱がある場合には、教師が罰を下すことを期待していることを示し、社会的権威から独立しているとされる道徳領域の問題でも、権威に依存していることを示している。

③ 道徳的判断における文化的影響を考慮した理論

Hauser (2006) は、道徳的判断のモジュールに Chomsky (2006) の生成文法の考え方を応用し、universal moral grammar (UMG) という考え方を提唱している。UMG で

は、すべての人間は生得的に善悪を判断する道徳的感觉を備えていると主張している (Mikhail, 2007)。Chomsky の生成文法のように、道徳的判断のためのパラメーターのセットを生得的に備えているが、文化や環境がそれぞれのパラメーターの価値を決めるため、現実の道徳的判断では、文化などの環境要因によって変化が生じることとなる。この立場にたつ研究者らは、トロッコ電車 (trolley car) 課題を用いて、実証的に研究をしている。トロッコ電車課題とは、「トロッコが線路上を走っている。トロッコの向かっている線路上では 5 人の人がいて、トロッコがこのまま進んでいけば 5 人は死んでしまう。線路上にはトロッコの行き先を変える引き込み線がある。引き込み線には一人の人間がいる。トロッコのブレーキは故障していて、線路上にはトロッコの行き先を変えて引き込み線に誘導するスイッチがある。あなたは、たまたまそこに居合わせた。あなたがスイッチを倒せば、5 人の命を救うことができるが、引き込み線にいる一人が犠牲になってしまう。あなたはどうか」というものである。5 人の命を助けるために、スイッチを倒して、一人の人間を犠牲にするか、何もせず、一人のために、5 人を見殺しにするかというような道徳的葛藤状態が示されている。この課題には、5 人の命を救うための方法が橋から人を落としてトロッコの行く手をふさぐ場合など、さまざまなバリエーションが作成されている。それらを用いて、道徳的判断に影響を与える要素を探ろうとするものである。たとえば、Hauser, Cushman, Young, Jin, & Mikhail (2007) は、多くの文化において、スイッチを変えてトロッコの行き先を変えることは容認されるが、橋の上から人を落としてトロッコの行き先を変えることは容認されないことを示している。二つのシナリオともに、一人の人の命か、5 人の命かという選択を迫られているという条件は同一であるが、結果とし

での判断は異なる。これは、崇高な目的のための方法として危害が生じたのか、危害は副作用であったのかという問題であると考えられている。多くの文化で崇高な目的のためであっても、恣意的に危害を生じさせることは受け入れられないという感覚を共有しているという。このような感覚は生得的で文化に共通であるが、さまざまな道徳的価値の優先順位は文化によって異なるとされている。

さらに、Haidt (2001) は、社会直観主義モデルの中で、道徳的判断の個人差、文化差を説明する枠組みを提供している。Haidt は道徳的状況の評価における感情の役割を重視し、道徳的判断は、道徳的直観を合理的に説明するために後付けで行われるものであると主張する。そして、道徳的直観は、試行錯誤を繰り返すことによって、その社会の中で許されること、許されないことを学習するプロセスを伴い、文化的文脈の中で発達するものとする。彼らの理論では、道徳を構成する枠組みとして、5つの領域を考える。①危害(harm)、②公平性、③互惠性(reciprocity)、④内集団に対する忠誠／尊敬、⑤純粋性(purity)である。これらの5領域のそれぞれがどの程度、道徳を構成するかということについては、集団によって異なると考えている。この考え方は、道徳基盤理論(moral foundations theory)と呼ばれている。この理論では、異文化だけでなく、同一の文化でも、社会経済的要因の異なる集団では、道徳を構成する各領域の重要性が異なると考えられる。たとえば、アメリカやブラジルの低所得者は、国旗でトイレを掃除するような内集団に対する尊敬に欠ける行動について、道徳的に問題と考えるが、両国の高所得者は、この行動を道徳的な問題とは考えないことが示されている(Haidt, Koller & Dias, 1993)。この理論では、道徳的直観や、その直観に反する状況の在り方、道徳的直観に反した場面において経験する感情等には文化による多様

性があることが想定されるが、しかし、道徳的判断が形成される基本的なプロセス自体は、文化に共通すると想定されている。

これに対して、Sachdeva, Singh, & Medin (2011)は、何を道徳と考えるかだけでなく、その道徳が適用される対象によっても、同じ行為が異なる道徳的評価にむすびつくことがあり、それが文化によって影響されることも指摘している(Fiske & Tetlock, 1997; Haidt & Baron, 1996; Rai & Fiske, 2011)。たとえば、Haidt & Baron (1996)はアメリカの大学生は、友人に売ろうとしている車が不良品であるかもしれないことを黙っているのは、道徳的に非難されるべきだと考えているが、車を売る相手が見知らぬ他人であれば、正直に話さないことを道徳的に受け入れることを示した。また、自分を養育してくれたことに対して、自分の両親に金銭的な対価を支払うことは、道徳的直観に反するが、車に乗せてくれた友人にガソリン代を支払うのは、そう感じないなど、相手との関係によって道徳的行動は異なることが示されている。このような例を挙げながら、Sachdeva, Singh, & Medin (2011)は、西洋社会における道徳観について、その行動を行う人と、その行動を受け取る人の両方がどういう人か、また、その関係性という視点を取り入れることに失敗していると指摘している。

さらに、Sachdeva, Singh, & Medin (2011)は、嘘をつくという行為の道徳性をカナダと中国の7～11歳の子どもに判断させたLee, Cameron, Xu, Fu, & Board (1997)の研究を引用し、道徳を構成する領域だけでなく、道徳の概念そのものが文化によって異なる可能性を指摘している。欧米など道徳が個人の権利に基づいて(right-based)概念化されている文化、すなわち、個人が一定の道徳観を内在化させる必要がある文化では、嘘の種類に関係なく、嘘は道徳的に問題であると判断される。一方、東洋など道徳が他者に対す

る義務に基づいて (duty-based) 概念化されている文化では、集団の利益のためにつく嘘は、他者を傷つける嘘に比べて、道徳的に問題ないと判断されるという。これは、普遍的な原理に基づく道徳観というより、状況や文脈の影響を重視した道徳観といえる。

④ 素朴道徳観における文化的影響

このような道徳概念の文化的相違について、一般の人々が日常的に使用する「道徳」の「素朴」概念を取り上げたのが、Buchtel, Guan, Peng, Su, Sang, Chen, & Bond (2015) である。彼らは西洋の道徳は、行動に関してのもので、道徳的行動はまるで他の状況にも一般化できる事実のようにゆるぎない道徳的義務のように扱われていると指摘している。それに対して、中国の儒教的背景をもった道徳観は徳目の倫理であるとしている。「徳目の倫理」では、道徳的行動を行う重要な鍵は善良な人柄の涵養であるとしている。このような人柄を発達させるために、他者への礼儀が重視される。「礼」は中国の道徳教育において中心的役割を果たしているという。このような考え方においては、具体的な行動は状況によって異なることが考えられる。たとえば、お辞儀をすることが礼儀にかなっているか、握手をすることが礼儀にかなっているかというのは状況依存的である。したがって、儒教的道徳では、権利を基盤とした (right-based) 道徳観ではなく、対人的な義務を基盤とした (duty-based) 道徳観の形をとる。徳のある適切な行動を導くものとして、絶対的で抽象的な義務ではなく、状況に配慮する気高く教養のある人柄の重要性を強調している。人柄の涵養に道徳的な焦点がある中国の道徳は、法律とは分離して考えられるという。礼儀から明らかに逸脱し、徳によって動機づけられないような逸脱者に対して、法律が適切な行動をとらせる動機づけを提供するとされている。徳のある人柄は、犯罪を犯

さないことによって表されるのではなく、日常の小さな行動の中に表される。このような道徳観を反映して、中国人の「素朴」な道徳的信念は西洋における「危害」を基盤とした道徳観ではなく、「危害」ではない概念を形成しているとしている。その概念として、Buchtel et al. (2015) は、「状況に配慮する気高く教養のある人柄」の対極として、野蛮 (incivility) を想定した。

Buchtel et al. (2015) が問題にしているのは、一般的な人が持つ「素朴」な道徳観である。道徳心理学の分野において、理論的には、道徳は「慣習や個人的選択」と区別されたり (Turiel, 1993)、審美的、宗教的、法律的、経済的判断とは異なるものとされたりしており、さらに、道徳の定義も理論によりさまざまである。しかし、一般の人は道徳からの逸脱と道徳以外の規範からの逸脱をどう区別しているのであろうか。この点に関して、Buchtel et al. (2015) は他の概念の研究でみられる典型性 (プロトタイプ) アプローチを道徳概念にも適用することを提唱している。すなわち、一般の人が持つ素朴信念は、抽象的な定義によって決定されるのではなく、道徳概念のプロトタイプに対する距離によって、道徳—不道徳を判断すると考える。そこで、道徳からの逸脱である不道徳な行動の典型を研究することを通して、中国と西洋の道徳観を知ることができるとしている。

彼らは、まずオーストラリア、カナダ、アメリカ (西洋文化) と北京、香港、上海 (中国文化) の大学生に「不道徳」と考えられる行動の自由記述を求めた。その中から選択した 26 項目の行動について、西洋 (オーストラリア、カナダ) と中国 (北京、香港) で「不道徳」、「悪いことであるが不道徳というわけではない」、「悪いことではない」の 3 つのカテゴリーのどれかに分類させた。さらに、いくつかの行動について、どの程度「危害」を加えるか (harmful)、あるいは、どの程度「野

蛮」(incivility)か評定させた。

その結果は、Buchtel et al. (2015) が想定した通り、儒教的思想の影響を受けた中国の道徳観では、危害や公平性という観点より、「野蛮か礼を守るか」という礼節に関連する道徳観が形成されていると指摘している。

(2) 道徳観に影響を与える文化的要因

① 文化的自己観

道徳観の違いに影響を及ぼすと考えられる文化的要因の一つは、Sachdeva, Singh, & Medin (2011) が指摘しているように、道徳が個人の権利に基づいて (right-based) 概念化されているか、道徳が他者に対する義務 (duty) に基づいて (duty-based) 概念化されているかという点である。義務を基盤としている (duty-based) 文化、権利を基盤としている (right-based) 文化という区別は、Markus & Kitayama (1991) が提唱する文化的自己観と密接に関連している。文化的自己観の理論では、欧米など個人主義の文化においては、個人は相互独立的自己観を持ち、東洋など集団主義の文化では、相互協調的自己観を持つとされ、それがさまざまな社会的行動の文化差に影響を与えているとされる。相互独立的自己観とは、個人の自我の境界が明確で、個人は互いに独立し、行動は個人の内的原因によって決定される。そのため、場面に関係なく個人の自我が発揮され、自我を守るために自己高揚的動機みられる。一方、相互強調的自己観は、自我の境界が比較的曖昧で、どこからどこまでが自分の自我であるのか不明確である。行動は個人の内的要因だけでなく、外的な要因の影響が大きく、その場の状況に応じて個人の自我が発揮される。そして、自己高揚的動機というより自己批判的動機がみられるとされている。道徳観においては、相互協調的自己観では他者に対する義務を基盤とした道徳が強調され、相互独立的自己観では他者から要求

される権利を基盤とした道徳が強調されると考えられている (e.g., Chiu, Dweck, Tong, & Fu, 1997)。

② 関係流動性

これに対して、山岸 (1998, 2014) は、一般的に人間関係を重視すると考えられている相互協調的自己観が優勢な日本社会において、相互独立的自己観が優勢なアメリカ社会に比べて、人への信頼が低いという、直観に反するような事実を示した。これに関して、山岸 (1998) は、社会における関係流動性という観点から、「信頼」と「安心」を区別することで、説明を試みている。すなわち、「信頼」は、相手が自分を裏切ってもおかしくない状況においても、相手は裏切ることなく誠実に行動するだろうという相手の人格の評価に基づく期待であるが、「安心」は相手が自己利益を守るために、自分を裏切ることはないだろうという、相手の自己利益の評価に根差した期待であると定義している。そして、人間関係を比較的自由に選択できる関係流動性の高い社会では、既存の関係に固執し続ければ、新たな関係形成によって得られるはずの利益を逃すことにつながるので、「信頼」を高く持つことによって、新たな関係形成を促す役割を果たす。一方、関係流動性の低い社会では、特定の相手との関係を維持することで相手からの特別な扱いを引き出すという互恵的なコミットメント関係から得られる「安心」が重要である。つまり、固定された社会的関係においては、相手を信頼できないとしても、相手が自分を裏切ることが相手の不利益につながるのであれば、相手は自分を裏切らないと「安心」できるのである。山岸 (1998) は、時代劇における悪代官と悪徳商人の間の賄賂と利権の交換関係を例に挙げて、「安心」を説明している。すなわち、代官は悪徳商人の人間性を信頼して賄賂を受け取っているのではなく、「お前も悪よの」な

どと言いながら、安心して賄賂を受け取っている。それは、賄賂を贈ったことをばらす誘因が相手にないことを知っているからである。また、商人の方も、代官が信頼に足る人間だと思って賄賂を渡すわけではなく、代官にとって賄賂をもらいたければ、利権を与えた方がよいことを知っているからである。つまり、代官と商人という関係の中で、「内集団びいき」的に行動することがそれぞれにとって有利な結果をもたらす関係であり、互いにそれを理解して関係を維持している。このような関係が「安心」を生み出すとしている。

このような内集団びいき的關係が日本に見られるのか確かめるために、山岸（1998）は、日米比較質問紙調査を実施した。その結果、内集団びいきを測定する3項目「まったく知らないセールスマンから中古車を買うよりは、友人が個人的に紹介してくれたセールスマンから買う方が安心できる」「まったく知らない相手と重要な要件について交渉することになった場合、知り合いが自分をその相手に紹介してくれることは非常に重要である」「医者、個人的な知り合いから紹介された場合には、普通の患者の場合より丁寧に診察する」については、日本人サンプルがアメリカ人サンプルより高く評価していることを示した。逆に、人間関係の信頼を測定する4項目「知らない人よりも、知った人の方がずっと信頼できる」「何をするにつけ、知らない人とするよりも、よく知った人とするほうが安心できる」「一般的に、長く付き合っている人は、必要なときに助けてくれることが多い」「私が信頼する人間は、長く付き合ってきた人間である」は、アメリカ人サンプルの方が日本人サンプルより高く評価していた。すなわち、日本人サンプルがアメリカ人サンプルに比べて一般的信頼が低く、内集団びいきを信じていることを示し、これらの結果を「安心の日本、信頼のアメリカ」と表現している。

このことから、関係流動性が高い社会では、他者への「信頼」を基盤とした道徳観が形成されると考えられる。これが相互独立的自己観と結合し、従来の西洋（欧米文化圏）を中心とした普遍的な善悪があるという道徳観を形成すると考えられる。一方、関係流動性の低い社会では、「信頼」より「安心」を基盤とした道徳観が形成されるのではないだろうか。

(3) 本研究の目的と仮説

「道徳」における文化的影響については、Turiel (1983, 1998) の領域理論や Haidt (2001, 2006; Haidt & Baron, 1996) の Moral foundations theory など、さまざまな観点から検討が重ねられてきた。しかし、Buchtel et al. (2015) が指摘するように、先行研究の多くは西欧文化の道徳観の枠組みに基づき、正義や公平など普遍的な原理の枠組みの中で道徳観の文化差を扱ったものであった。本研究では、西洋とは異なる枠組みを持つと考えられる日本の道徳観をとらえるために、日本人大学生を対象に、Buchtel et al. (2015) の追試を実施し、一般的な人々が持つ「素朴」な道徳観について、日本の特徴を検討する。

加えて、関係流動性と相互独立的一相互協調的自己観が道徳観に与える影響を検討することを目的とする。

日本と中国はともに、儒教的思想の影響を受け、また、相互協調的自己観を持つとされ、義務を基盤とした (duty-based) 道徳観を持つとされている。日本の道徳観も、危害や公平性という普遍的概念だけでなく、中国と同様、相互協調的自己観や儒教的思想を背景にした礼節などの影響を受けていると考えられる。半面、儒教は古代中国で孔子が興し、日本では江戸時代に「朱子学」など日本独自の展開がみられたが、第二次世界大戦以降、儒教的思想の影響は弱まり、西洋文化の影響

が大きく広がっている。文化を扱う領域では、西洋と東洋という区別が主流で、日本と中国は「東洋」という同じ文化圏に所属すると考えられているが、道徳観における日本と中国の差もみられると考えられる。また、山岸 (1998, 2014) が指摘しているように、日本は関係流動性が低く、「信頼」より「安心」を基盤とした道徳観が形成される可能性がある。それが、相互協調的自己観と結合した道徳観を形成すると考えられる。これらの可能性について検討する。Buchtel et al. (2015) は相互協調的自己観や関係流動性などの指標を調査していないため、比較はできないが、日本をはじめとした東洋 (東アジア文化圏) の道徳観が形成される要因を探る手がかりが得られると期待する。

2. 方法

(1) 調査対象者

日本の大学 (1 校) に通う 130 名 (男性 81 名、女性 49 名) に質問紙を実施した。本研究では道徳観についての文化的影響を検討するため、国籍が日本ではない 9 名を分析の対象から除外した。さらに、道徳観については世代による影響があると考えられたため、70 代以上の 3 名についても分析から除外した。分析の対象となったのは、18 歳～25 歳の 118 名 (男性 74 名、女性 44 名；平均年齢 19.01 歳) であった。

(2) 調査内容

① 道徳観に関する質問

Buchtel et al. (2015) の使用した 26 項目を執筆者が日本語に訳した項目に、日本で道徳の問題として注目を集めているいじめに関する 2 項目を追加した。追加した項目は「いじめを傍観すること」と「集団で特定の人を無視すること」である。これらの 2 項目を追加した合計 28 項目 (表 1 参照) について、

Buchtel et al. (2015) と同様、「不道徳」、「悪いことであるが不道徳というわけではない」、「悪いことではない」の 3 つのカテゴリーのどれかに分類させた。

② 使用した行動の特徴に関する質問

使用した各行動の特徴について、次の 4 語を用いて評価をさせた。調査項目が多くなるため、調査対象者を次の 2 群に分け評価を行った。すなわちどの程度「危害を加えるか」、「野蛮か」の 2 語から 7 段階評定を行う群と、どの程度「迷惑をかけるか」、「みっともないか」の 2 語から 7 段階評定を行う群である。Buchtel et al. (2015) は西洋的・普遍的道徳観に関連するものとして harmful, 中国的・東洋的道徳観に関連するものとして uncivilized の 2 語を用いている。本研究では harmful は「危害」と訳したが、uncivilized の日本語訳は難しく、「野蛮」「迷惑」「みっともない」の 3 語に分けて測定した。

③ 関係流動性

Yuki, Schug, Horikawa, Takemura, Sato, Yokota, & Kamaya (2007) が作成した 12 項目の関係流動性尺度 (日本語) を使用した (付表 1)。各項目について、自分の周囲の人たちに当てはまる程度を 6 段階で評定させた。

④ 文化的自己観

高田・大本・清家 (1996) が作成した相互独立的一相互協調的自己観尺度 (改定版) を使用した (付表 2)。相互独立的自己観・相互協調的自己観をそれぞれ測定する各 10 項目、計 20 項目について、自分自身にあてはまる程度を 7 段階で回答を求めた。

⑤ 食後の時間・空腹の程度・心を落ち着かせる食べ物

最後の食事からの経過時間を分単位で、空腹の程度を 7 段階で、心を落ち着かせる食べ

物について、自由記述で回答させた。この項目については、本論文では分析の対象としない²⁾。

(3) 手続き

大学の授業を利用して調査協力者を募った。授業が終了した後、調査の目的を説明し、匿名での実施であること、調査結果は統計的に処理され個人が特定できないこと、調査に協力しなくても不利益がないことなどを説明し、協力の意志のある学生にその場に残ってもらい、調査票を配布した。調査票は、表紙、「道徳観についての質問」「行動の特徴についての質問」「関係流動性」「文化的自己観」「食事についての質問」の順に冊子としてまとめられていた。また、社会統計上の変数としては、性別と年齢、学科、学年を回答してもらった。「行動の特徴についての質問」に関して、「危害」「野蛮」の程度を問う調査票と「迷惑」「みっともない」の程度を問う調査票の2種類があり、それらはランダムに配布された。調査は15分程度で終了し、終了した者から調査票を提出して、退室した。

3. 結果

(1) 各行動の道徳性判断

各行動について、「不道徳」「悪いことではあるが、不道徳というわけではない」「悪いことではない」の3分類の割合を表1に示す。表1は不道徳と分類された割合が高い順に示したが、まず、「悪くないこと」とした割合に注目したい。Buchtel et al. (2015)の採用した26項目の行動は、カナダ、オーストラリア、香港、中国の大学生に、「不道徳」な行動の例を記述させたものの中から、「道徳観」の違いを検討するために採用された項目である。したがって、何らかの意味で「悪い」行動と考えられる。しかし、本研究では調査対象者の25%以上が悪くないことと判断し

た行動が5項目あった（「遊びで多くの人とセックスすること（31.4%）」、「自分の行動を導く価値観を持たないこと（28.8%）」、「自分のために誰かを利用すること（27.1%）」、「利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること（26.5%）」、「偽善的で裏表があること（25.6%）」）。一方、悪くないことと分類した対象者が1%未満の行動は「汚職やわいろに加担すること（0.8%）」、「他人の持ち物を盗むこと（0.8%）」、「人を殺すこと」の3項目で、明確に法律に違反する行動であった。

次に、「不道徳」と判断する行動に注目し、各行動の「不道徳」と判断した割合をBuchtel et al. (2015)の中国(Beijin)のデータ(N=101)、西洋データ(オーストラリアN=68、カナダN=68)と比較した(表2)。西洋のデータと日本のデータの差の絶対値の平均は、18.5%、北京のデータと日本のデータの差の絶対値の平均は、20.3%であった。両者は、ほぼ同じで、日本の道徳観は、西洋に近いわけでも、北京に近いわけでもなく、西洋とも北京とも同じように異なる傾向が示されている。

西洋のデータと比較して、日本の方が「不道徳」と判断する割合が20%以上高い行動は、「人前で大声で罵ること」「ゴミのポイ捨て」「道路につばを吐くこと」「公共の場で大声で話したり笑ったりすること」「自国の法律に背くこと」「他人の気持ちに配慮しないこと」である。逆に、西洋の方が「不道徳」と判断する割合が20%以上高いのは、「自分のために誰かを利用すること」「浮気すること」「自分の行動を導く倫理観を持たないこと」である。日本の方が不道徳とする割合が高い行動で、「人前で大声で罵ること」「ゴミのポイ捨て」「道路に唾を吐くこと」は北京のデータとの差は少ない。「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」は、西洋よりは日本の方が不道徳とする割合が高いが、北京と比較すると北京の方が「不道徳」

とする割合が高い。「人前で大声で罵ること」や「ごみのポイ捨て」などを不道徳と考える中国の道徳観は civilization の影響があると Buchtel は結論づけているが、日本も中国ほどではないが、西洋に比較すれば、中国と同様 civilization の影響があるのかもしれない。加えて、「自国の法律に背くこと」「他人の気持ちに配慮しないこと」は中国と比較しても日本の方が不道徳とする割合が大きく、逆に、「自分のために誰かを利用すること」「浮気をすること」は、北京と比較しても日本の方が「不道徳」とする割合が低い。日本の特徴かもしれない。

北京と比較して、日本の方が「不道徳」と判断する割合が20%以上高いのは、「自国の

法律に背くこと」「人を殺すこと」「他人の持ち物を盗むこと」「他人を意図的に傷つけること」「他人の気持ちに配慮しないこと」である。前述の通り、このうち、「自国の法律に背くこと」「他人の気持ちに配慮しないこと」は、西洋と比較しても日本の方が高い。「人を殺すこと」「他人の持ち物を盗むこと」「他人を意図的に傷つけること」という harm に関する項目は西洋との差は少ない。Buchtel et al. (2015) は西洋の harm に対して、中国は civilization が道徳の基準となると結論づけているが、harm に関しては、日本は西洋と同様に不道徳と考えていることが示唆される。

日本より北京の方が「不道徳」と判断する

表1 各行動の道徳判断の分類の割合(不道徳順)

				(%)
	不道徳	悪いこと	悪くない	合計
他人の持ち物を盗むこと	90.7	8.5	0.8	100.0
人を殺すこと	87.3	11.9	0.8	100.0
他人を意図的に傷つけること	77.1	20.3	2.5	100.0
汚職やわいろに加担すること	74.6	24.6	0.8	100.0
自分の利益のために、意図的に誰かに危害を加えること	74.6	21.2	4.2	100.0
ごみのポイ捨てをすること	72.6	25.6	1.7	100.0
期末試験で不正行為をすること	72.0	25.4	2.5	100.0
人前で大声でののしったり、悪態をつくこと	69.5	25.4	5.1	100.0
人種による偏見を持つこと	68.4	29.1	2.6	100.0
友だちを裏切ること	65.0	29.9	5.1	100.0
無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること	62.7	32.2	5.1	100.0
自国の法律に背くこと	62.7	29.7	7.6	100.0
集団で特定の人を無視すること	62.7	33.9	3.4	100.0
浮気をすること	55.1	34.7	10.2	100.0
道路に唾を吐くこと	55.1	32.2	12.7	100.0
他人の気持ちに配慮しないこと	53.8	39.3	6.8	100.0
重要なことについて嘘をつくこと	50.0	44.1	5.9	100.0
親を敬わないこと	46.6	41.5	11.9	100.0
責任や義務から逃げること	38.5	46.2	15.4	100.0
公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること	38.1	54.2	7.6	100.0
いじめを傍観すること	36.8	48.7	14.5	100.0
公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと	36.4	45.8	17.8	100.0
遊びで多くの人とセックスすること	35.6	33.1	31.4	100.0
利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考慮すること	29.9	43.6	26.5	100.0
人の陰口を言うこと	29.9	56.4	13.7	100.0
偽善的で裏表があること	24.8	49.6	25.6	100.0
自分のために誰かを利用すること	24.6	48.3	27.1	100.0
自分の行動を導く価値観を持たないこと	21.2	50.0	28.8	100.0

表2 不道徳の割合についてBuchtel, et. al.(2015)との比較(西洋との差が大きい順)

	不道徳と分類した割合(%)				
	本研究	Buchtel, et al. (2015)			
		Western N=136	Beijin N=101	Wesstern- Japan	Beijin-Japan
人前で大声でののしったり、悪態をつくこと	70	18	75	-54	5
ごみのポイ捨てをすること	73	20	67	-53	-6
道路に唾を吐くこと	55	11	70	-44	15
自分のために誰かを利用すること	25	68	63	43	38
公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること	38	2	60	-36	22
自国の法律に背くこと	63	28	15	-35	-48
浮気をすること	55	83	79	28	24
他人の気持ちに配慮しないこと	54	26	33	-28	-21
自分の行動を導く価値観を持たないこと	21	45	13	24	-8
遊びで多くの人とセックスすること	36	17	64	-19	28
親を敬わないこと	47	30	74	-17	27
責任や義務から逃げること	39	24	40	-15	1
期末試験で不正行為をすること	72	61	53	-11	-19
自分の利益のために、意図的に誰かに危害を加えること	75	85	62	10	-13
偽善的で裏表があること	25	35	34	10	9
汚職やわいろに加担すること	75	84	66	9	-9
公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと	36	28	69	-8	33
重要なことについて嘘をつくこと	50	58	47	8	-3
他人の持ち物を盗むこと	91	83	56	-8	-35
人を殺すこと	87	81	42	-6	-45
人の陰口を言うこと	30	26	69	-4	39
人種による偏見を持つこと	68	65	55	-3	-13
友だちを裏切ること	65	68	79	3	14
利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること	30	27	40	-3	10
他人を意図的に傷つけること	77	76	55	-1	-22
無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること	63	63	83	0	20
いじめを傍観すること	37				
集団で特定の人を無視すること	63				
			差の絶対値の平均	18.5	20.3

※ 表1の小数点1位で四捨五入

割合が20%以上高いのは、「人の陰口を言うこと」「自分のために誰かを利用すること」「公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと」「遊びで多くの人とセックスをすること」「親を敬わないこと」「浮気をすること」「公共の場所で大声で話したり、わらったりすること」「無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること」である。このうち、前述の通り「自分のために誰かを利用すること」「浮気をすること」は西洋と比較しても、日本の方が「不道徳」とする割合が低い。「遊びで多くの人とセックスをすること」「親を敬わないこと」「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」は、北京と比較すると日

本の方が「不道徳」とする割合は低いが、西洋と比較すると日本の方が高い(順に西洋との差が19%、17%、36%)。

(2) 使用した行動の特徴判定

使用した各行動の記述について、その行動の特徴を、どの程度「人に危害を加えると思うか」か、「野蛮」か、「迷惑」か、「みっともない」という4語から評定させた結果を表3に示す。「危害」は西洋的、普遍的な道徳概念と関連すると考えられ、「野蛮」、「迷惑」、「みっともない」は中国的な野蛮(incivility)に関連すると想定された。質問数の多さから、「危害」・「野蛮」の評定と、「迷

惑」・「みっともない」の評定を行った調査対象者は、同じ人数であるが、異なる個人である。表3は、危害の平均点が高い順に示した。「人を殺すこと」は「危害」「野蛮」「迷惑」「みっともない」のすべてにおいて、もっとも高い得点を示した。また、「危害」は、平均4.38～6.63、「野蛮」は平均4.12～6.69、「迷惑」は平均3.84～6.64、「みっともない」は平均4.15～6.19とすべての行動が4つの評価すべてに関して高得点を示す傾向にあった。「迷惑」は、もっとも低い「偽善的で裏表があること」が平均3.84と7段階評価の理論的中点である4より低かったが、その他の行動については、すべての評価で4以上であった。本研究で使用した行動は、すべて「危害」を加え、「野蛮」で「迷惑」で「みっともない」

と判断できるものであったといえる。

各行動について、「危害」「野蛮」「迷惑」「みっともない」のそれぞれの評価と、「不道徳」と判断した割合、「悪いことではない」と判断した割合との間でスピアマンの順位相関を求めた(表4)。「不道徳」については、「危害」が $r=.930$ ($p<.01$)、「野蛮」が $r=.759$ ($p<.01$)、「迷惑」が $r=.806$ ($p<.01$)、「みっともない」が $r=.756$ ($p<.01$)とどの評価ともかなり高い正の相関を示した。「悪くないこと」については、「危害」が $r=-.920$ ($p<.01$)、「野蛮」が $r=-.677$ ($p<.01$)、「迷惑」が $r=-.787$ ($p<.01$)、「みっともない」が $r=-.795$ ($p<.01$)とすべての評価について高い負の相関を示した。中でも、「危害」は、「不道徳」に $r=.930$ 、「悪くないこと」に $r=-.920$ の順位相関を示して

表3 各行動の特徴についての評価の平均(危害+B2.N23の得点順)

	危害 N=59			野蛮 N=59			迷惑 N=59			みっともない N=59		
	M	SD	順	M	SD	順	M	SD	順	M	SD	順
人を殺すこと	6.63	0.83	1.0	6.69	0.84	1.0	6.46	1.25	1.0	6.19	1.63	1.0
他人の持ち物を盗むこと	6.41	0.96	2.0	6.10	1.09	2.0	6.44	1.02	2.0	6.17	1.48	2.5
他人を意図的に傷つけること	6.17	0.99	3.0	6.02	1.18	3.5	6.15	1.22	4.0	6.10	1.40	4.0
人種による偏見を持つこと	5.98	1.14	4.0	5.66	1.29	9.0	5.69	1.57	12.0	5.71	1.66	12.0
自分の利益のために、意図的に誰かに危害を加えること	5.95	1.06	5.0	5.71	1.25	8.0	6.20	1.19	3.0	5.47	1.66	20.5
汚職やわいろに負担すること	5.92	1.19	6.0	5.85	1.34	7.0	5.54	1.52	14.0	5.88	1.50	7.5
自国の法律に背くこと	5.83	1.54	7.0	5.90	1.36	5.0	5.60	1.69	13.0	5.59	1.70	15.0
人前で大声でののしったり、悪態をつくこと	5.81	1.14	8.0	6.02	1.18	3.5	5.90	1.20	7.0	5.73	1.54	11.0
集団で特定の人を無視すること	5.73	1.14	9.0	5.48	1.51	15.0	5.88	1.22	8.5	5.88	1.42	7.5
ごみのポイ捨てをすること	5.71	1.25	10.0	5.53	1.39	13.0	5.88	1.25	8.5	5.90	1.58	6.0
友だちを裏切ること	5.67	1.33	11.0	5.54	1.52	12.0	6.05	1.18	5.0	6.00	1.50	5.0
期末試験で不正行為をすること	5.66	1.46	12.0	5.88	1.22	6.0	5.02	2.10	22.0	6.17	1.30	2.5
無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること	5.51	1.15	13.0	5.51	1.56	14.5	5.81	1.48	10.5	5.78	1.49	9.0
他人の気持ちに配慮しないこと	5.47	1.28	14.0	4.12	1.72	28.0	5.92	1.26	6.0	4.76	1.76	27.0
重要なことについて嘘をつくこと	5.42	1.35	15.0	5.29	1.35	18.0	5.81	1.47	10.5	5.49	1.66	18.5
浮気をすること	5.40	1.45	16.0	5.61	1.43	11.0	5.24	1.62	17.0	5.59	1.63	15.0
公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること	5.39	1.36	17.0	5.44	1.41	17.0	5.53	1.25	15.0	5.76	1.56	10.0
いじめを傍観すること	5.15	1.41	18.0	5.26	1.52	19.0	5.05	1.43	21.0	5.24	1.58	22.0
人の陰口を言うこと	5.12	1.44	19.0	5.05	1.55	22.0	5.12	1.44	20.0	5.59	1.52	15.0
道路に唾を吐くこと	4.97	1.72	20.0	5.17	1.72	20.5	5.36	1.65	16.0	5.66	1.60	13.0
責任や義務から逃げること	4.88	1.74	21.0	4.75	1.83	25.0	5.19	1.76	18.0	5.47	1.55	20.5
親を敬わないこと	4.85	1.61	22.0	4.86	1.70	23.0	4.56	1.96	25.0	4.98	1.93	26.0
自分のために誰かを利用すること	4.75	1.80	23.0	4.81	1.68	24.0	5.14	1.44	19.0	5.15	1.71	24.0
公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと	4.64	1.74	24.5	4.59	1.74	26.0	4.76	1.57	24.0	5.53	1.47	17.0
遊びで多くの人とセックスすること	4.64	2.00	24.5	5.51	1.79	14.5	4.20	1.98	26.0	5.08	1.93	25.0
自分の行動を深く価値観を持たないこと	4.53	1.64	26.0	5.64	1.35	10.0	4.00	1.86	27.0	5.49	1.68	18.5
利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること	4.46	1.68	27.0	5.17	1.39	20.5	4.88	1.54	23.0	5.19	1.79	23.0
偽善的で裏表があること	4.38	1.90	28.0	4.36	1.70	27.0	3.84	1.79	28.0	4.15	1.74	28.0

表4 行動の特徴評価の順位相関（スピアマンのρ）

	危害	野蛮	迷惑	みつともない	不道德割合	悪くないこと割合
危害	1					
野蛮	.776**	1				
迷惑	.868**	.541**	1			
みつともない	.726**	.722**	.594**	1		
不道德割合	.930**	.759**	.806**	.756**	1	
悪くないこと割合	-.920**	-.677**	-.787**	-.795**	-.942**	1

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）

表5 関係流動性・文化的自己観の記述統計

	項目数	最小値	最大値	M	SD	α
関係流動性	12	2.17	5.58	3.80	.67	.74
独立的自己観	10	3.00	7.00	4.76	.94	.84
協調的自己観	10	2.20	7.00	4.86	.91	.81

表6 相対的自己観の記述統計

	最小値	最大値	M	SD
相対的自己観*	-3.40	4.40	-0.10	1.41

* 相互独立的自己観から相互協調的自己観を減算したものの。

おり、日本の道徳観に強い影響を与える概念であることが示されている。

(3) 関係流動性と文化的自己観

関係流動性の12項目について、逆転項目の処理をした上で、調査対象者ごとに12項目の平均値を求め、関係流動性得点とした。文化的自己観については、相互独立的自己観・相互協調的自己観を測定する各10項目に関して、同様に調査対象者ごとの平均を求め、それぞれ相互独立的自己観得点、相互協調的自己観得点とした。それぞれの記述統計を表5に示す。各尺度のクロンバックのαは、.74～.84と高く、尺度として使用できることを示している。関係流動性は、6段階評価でM=3.80（SD=.67）と理論的中点（3.5）よりやや高い。また、相互独立的自己観（M=4.76, SD=.94）、相互協調的自己観

（M=4.86, SD=.91）ともに、7段階評価の理論的中点4点より高く、相互独立的でも、相互協調的でもある日本人の文化的自己観を示していると思われる。

文化的自己観について、調査対象者ごとの相互独立的自己観得点から相互協調的自己観得点を減算したものを相対的自己観得点とした（表6）。正の値は相互独立的自己観が強いことを示し、負の値は相互協調的自己観が強いことを示している。相対的自己観得点の平均値は-0.10（SD=1.41）と、調査協力者全体でみれば相互独立的でも相互協調的でもある自己観の特徴を示しているが、得点の範囲は-3.40～4.40と幅広く、相対的に相互独立的な個人から相対的に相互協調的な個人まで幅広いことが示されている。

各尺度間の積率相関を求めたところ、関係流動性と相互独立的自己観（r=.121）・相

表7 関係流動性と文化的自己観の積率相関

	関係流動性	相対的自己観	独立的自己観	協調的自己観
関係流動性	1			
相対的自己観	0.047	1		
独立的自己観	0.121	.771**	1	
協調的自己観	0.051	-.753**	-0.162	1

互協調的自己観 ($r=.051$)・相対的自己観 ($r=.047$)の有意な相関は認められなかった(表7)。関係流動性と文化的自己観の間に相関は認められない。また、相互独立的自己観と相互協調的自己観の間にも有意な相関は認められなかった ($r=-.162$)。相互独立的自己観と相互協調的自己観が対立概念であるという従来の仮定に対して、疑問を投げかける結果となった。

(4) 関係流動性と各行動の道徳的判断

関係流動性の平均値 ($M=3.80$) を基準として、関係流動性低群 ($N=64$) と高群 ($N=54$) に分類し、各行動の道徳カテゴリーとクロス集計を行った(表8)。 χ^2 検定の結果、8項目が $p<.05$ で有意差が認められ、2項目が $p<.10$ で有意傾向であった。有意差が認められたのは、「偽善的で裏表があること」「自国の法律に背くこと」「人の陰口を言うこと」「人種による偏見を持つこと」「友達を裏切ること」「他人の気持ちに配慮しないこと」「いじめを傍観すること」「集団で特定の人を無視すること」の8項目、有意傾向であったのは、「無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること」「期末試験で不正行為をすること」の2項目であった。各行動について、「不道徳」とする割合は、関係流動性の高群に高く、「悪くないこと」とする割合は関係流動性の低群に高いことが示された。

(5) 文化的自己観と各行動の道徳的判断

相対的自己観がプラスの独立的自己観優勢

群 ($N=47$) とマイナスの協調的自己観優勢群 ($N=71$) に分け、各行動の道徳カテゴリーとのクロス集計を行った(表9)。 χ^2 検定の結果、3項目が $p<.05$ で有意差が認められ、3項目が $p<.10$ で有意傾向であった。有意差が認められたのは、「親を敬わないこと」「自国の法律に背くこと」「遊びで多くの人とセックスすること」の3項目、有意傾向であったのは「他人の持ち物を盗むこと」「他人を意図的に傷つけること」「友達を裏切ること」の3項目であった。「親を敬わないこと」「自国の法律に背くこと」「他人を意図的に傷つけること」「友だちを裏切ること」については、相互協調的自己観優勢群は相互独立的自己観優勢群と比較して「不道徳」と判断する割合が高いことが示された。

4. 考察

(1) 道徳観の文化的影響について

28の行動について、「不道徳」「悪いことではあるが、不道徳ではない」「悪いことではない」の3つに分類させ、各行動の「不道徳」と判断した割合を Buchtel et al. (2015) の中国データ、西洋データと比較した結果、西洋のデータと日本のデータの差の絶対値の平均、北京のデータと日本のデータの差の絶対値の平均は、それぞれ18.5%、20.3%であった。これは、日本のデータは、西洋のデータ、中国のデータのどちらに対しても、同様に異なることを示している。また、中国と比較して「不道徳」と判断する割合が高いが、西洋と

日本人大学生の行動の道徳的判断と関係流動性・文化的自己観の関係に関する研究

表8 関係流動性の高さと各行動の道徳性カテゴリーのクロス集計

	流動性	不道徳	悪いこと	悪くない	合計	$\chi^2(2)$
人を殺すこと	低群 87.5%	10.9%	1.6%	100.0%	0.946	
	高群 87.0%	13.0%	0.0%	100.0%		
汚穢やわいらに加担すること	低群 71.9%	28.1%	0.0%	100.0%	2.039	
	高群 77.8%	20.4%	1.9%	100.0%		
偽善的で裏表があること	低群 23.4%	40.6%	35.9%	100.0%	8.227 *	
	高群 26.4%	60.4%	13.2%	100.0%		
公共の場で大声で話したり、笑ったりすること	低群 35.9%	54.7%	9.4%	100.0%	0.743	
	高群 40.7%	53.7%	5.6%	100.0%		
浮気すること	低群 53.1%	39.1%	7.8%	100.0%	1.612	
	高群 57.4%	29.6%	13.0%	100.0%		
公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと	低群 29.7%	46.9%	23.4%	100.0%	4.289	
	高群 44.4%	44.4%	11.1%	100.0%		
他人の持ち物を盗むこと	低群 90.6%	7.8%	1.6%	100.0%	0.916	
	高群 90.7%	9.3%	0.0%	100.0%		
親を敬わないこと	低群 42.2%	43.8%	14.1%	100.0%	1.323	
	高群 51.9%	38.9%	9.3%	100.0%		
重要なことについて嘘をつくこと	低群 45.3%	46.9%	7.8%	100.0%	1.698	
	高群 55.6%	40.7%	3.7%	100.0%		
責任や義務から逃げること	低群 33.3%	46.0%	20.6%	100.0%	3.38	
	高群 44.4%	46.3%	9.3%	100.0%		
自分のために誰かを利用すること	低群 23.4%	43.8%	32.8%	100.0%	2.346	
	高群 25.9%	53.7%	20.4%	100.0%		
無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること	低群 53.1%	40.6%	6.3%	100.0%	5.503 +	
	高群 74.1%	22.2%	3.7%	100.0%		
利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること	低群 25.4%	42.9%	31.7%	100.0%	2.368	
	高群 35.2%	44.4%	20.4%	100.0%		
自国の法律に背くこと	低群 51.0%	35.9%	12.5%	100.0%	8.984 *	
	高群 75.9%	22.2%	1.9%	100.0%		
人の陰口を言うこと	低群 23.8%	54.0%	22.2%	100.0%	9.137 *	
	高群 37.0%	59.3%	3.7%	100.0%		
ごみのポイ捨てをすること	低群 68.3%	28.6%	3.2%	100.0%	2.534	
	高群 77.8%	22.2%	0.0%	100.0%		
他人を意図的に傷つけること	低群 71.9%	25.0%	3.1%	100.0%	2.179	
	高群 83.3%	14.8%	1.9%	100.0%		
遊びで多くの人とセックスすること	低群 32.8%	32.8%	34.4%	100.0%	0.713	
	高群 38.9%	33.3%	27.8%	100.0%		
人前で大声でののしったり、悪態をつくこと	低群 65.6%	29.7%	4.7%	100.0%	1.344	
	高群 74.1%	20.4%	5.6%	100.0%		
人種による偏見を持つこと	低群 57.1%	39.7%	3.2%	100.0%	8.018 *	
	高群 81.5%	16.7%	1.9%	100.0%		
自分の利益のために、意図的に誰かに危害を加えること	低群 68.8%	26.6%	4.7%	100.0%	2.611	
	高群 81.5%	14.8%	3.7%	100.0%		
友だちを裏切ること	低群 54.0%	36.5%	9.5%	100.0%	9.664 **	
	高群 77.8%	22.2%	0.0%	100.0%		
期末試験で不正行為をすること	低群 64.1%	31.3%	4.7%	100.0%	5.632 +	
	高群 81.5%	18.5%	0.0%	100.0%		
道路に唾を吐くこと	低群 48.4%	35.9%	15.6%	100.0%	2.661	
	高群 63.0%	27.8%	9.3%	100.0%		
他人の気持ちに配慮しないこと	低群 52.4%	34.9%	12.7%	100.0%	7.582 *	
	高群 55.6%	44.4%	0.0%	100.0%		
自分の行動を導く価値観を持たないこと	低群 15.6%	53.1%	31.3%	100.0%	2.603	
	高群 27.8%	46.3%	25.9%	100.0%		
いじめを傍観すること	低群 26.6%	53.1%	20.3%	100.0%	7.806 *	
	高群 49.1%	43.4%	7.5%	100.0%		
集団で特定の人を無視すること	低群 53.1%	40.6%	6.3%	100.0%	7.291 *	
	高群 74.1%	25.9%	0.0%	100.0%		

※ 流動性低群・・・関係流動性低群(N=64), 流動性高群・・・関係流動性高群(N=54)

※※ ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.10$

表9 相対的自己観と各行動の道徳性カテゴリーのクロス集計

		不道徳	悪いこと	悪くない	合計	$\chi^2(2)$
人を殺すこと	協調的自己	85.9%	14.1%	0.0%	100.0%	2.254
	独立的自己	89.1%	8.7%	2.2%	100.0%	
汚職やわいろに加担すること	協調的自己	80.3%	18.3%	1.4%	100.0%	4.556
	独立的自己	65.2%	34.8%	0.0%	100.0%	
偽善的で裏表があること	協調的自己	25.4%	50.7%	23.9%	100.0%	0.109
	独立的自己	24.4%	48.9%	26.7%	100.0%	
公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること	協調的自己	36.6%	57.7%	5.6%	100.0%	0.848
	独立的自己	41.3%	50.0%	8.7%	100.0%	
浮気をする事	協調的自己	56.3%	35.2%	8.5%	100.0%	0.649
	独立的自己	54.3%	32.6%	13.0%	100.0%	
公共交通機関でお年寄りに席を譲らないこと	協調的自己	35.2%	47.9%	16.9%	100.0%	0.238
	独立的自己	39.1%	43.5%	17.4%	100.0%	
他人の持ち物を盗むこと	協調的自己	87.3%	12.7%	0.0%	100.0%	5.359 *
	独立的自己	95.7%	2.2%	2.2%	100.0%	
親を敬わないこと	協調的自己	53.5%	40.8%	5.6%	100.0%	8.221 *
	独立的自己	34.8%	43.5%	21.7%	100.0%	
重要なことについて嘘をつくこと	協調的自己	54.9%	39.4%	5.6%	100.0%	1.835
	独立的自己	43.5%	52.2%	4.3%	100.0%	
責任や義務から逃げる事	協調的自己	41.4%	48.6%	10.0%	100.0%	3.081
	独立的自己	34.8%	43.5%	21.7%	100.0%	
自分のために誰かを利用すること	協調的自己	23.9%	53.5%	22.5%	100.0%	2.386
	独立的自己	23.9%	41.3%	34.8%	100.0%	
無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること	協調的自己	63.4%	31.0%	5.6%	100.0%	0.242
	独立的自己	60.9%	34.8%	4.3%	100.0%	
利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること	協調的自己	28.6%	47.1%	24.3%	100.0%	0.725
	独立的自己	32.6%	39.1%	28.3%	100.0%	
自国の法律に背くこと	協調的自己	70.4%	26.8%	2.8%	100.0%	7.379 *
	独立的自己	52.2%	32.6%	15.2%	100.0%	
人の隙口を言うこと	協調的自己	33.8%	56.3%	9.9%	100.0%	2.856
	独立的自己	24.4%	55.6%	20.0%	100.0%	
ごみのポイ捨てをする事	協調的自己	71.4%	28.6%	0.0%	100.0%	3.568
	独立的自己	73.9%	21.7%	4.3%	100.0%	
他人を意図的に傷つけること	協調的自己	80.3%	19.7%	0.0%	100.0%	4.951 *
	独立的自己	71.7%	21.7%	6.5%	100.0%	
遊びで多くの人とセックスすること	協調的自己	35.2%	42.3%	22.5%	100.0%	8.314
	独立的自己	37.0%	19.6%	43.5%	100.0%	
人前で大声でののりしたり、悪態をつくこと	協調的自己	73.2%	23.9%	2.8%	100.0%	2.189
	独立的自己	65.2%	26.1%	8.7%	100.0%	
人種による偏見を持つこと	協調的自己	71.8%	25.4%	2.8%	100.0%	1.389
	独立的自己	62.2%	35.6%	2.2%	100.0%	
自分の利益のために、意図的に誰かに危害を加えること	協調的自己	77.5%	19.7%	2.8%	100.0%	1.361
	独立的自己	69.6%	23.9%	6.5%	100.0%	
友だちを裏切ること	協調的自己	70.0%	28.6%	1.4%	100.0%	5.713
	独立的自己	56.5%	32.6%	10.9%	100.0%	
期末試験で不正行為をする事	協調的自己	73.2%	25.4%	1.4%	100.0%	0.973
	独立的自己	71.7%	23.9%	4.3%	100.0%	
道路に唾を吐くこと	協調的自己	53.5%	36.6%	9.9%	100.0%	1.758
	独立的自己	58.7%	26.1%	15.2%	100.0%	
他人の気持ちに配慮しないこと	協調的自己	56.3%	36.6%	7.0%	100.0%	0.717
	独立的自己	48.9%	44.4%	6.7%	100.0%	
自分の行動を強く価値観を持たないこと	協調的自己	16.9%	56.3%	26.8%	100.0%	3.682
	独立的自己	28.3%	39.1%	32.6%	100.0%	
いじめを傍観すること	協調的自己	38.6%	50.0%	11.4%	100.0%	1.470
	独立的自己	34.8%	45.7%	19.6%	100.0%	
集団で特定の人を無視すること	協調的自己	63.4%	35.2%	1.4%	100.0%	2.326
	独立的自己	63.0%	30.4%	6.5%	100.0%	

※ 協調的自己・・・相互協調的自己観優勢群(N=71), 独立的自己・・・相互独立的自己観優勢群(N=46)

※※ * $p<.05$, ** $p<.10$

比較すると差が少ない行動は、「人を殺すこと」「他人の持ち物を盗むこと」「他人を意図的に傷つけること」という「危害」を表す項目であることから、日本のデータは西洋と同様に「危害」など普遍的で抽象的な道徳観の影響を受けていると考えられる。一方、西洋と比べて日本の方が「不道徳」とする割合が大きい。中国との差が少ないのは、「人前で大声で罵ること」「ごみのポイ捨て」「道路に唾を吐くこと」などである。また、「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」は、西洋よりは日本の方が不道徳とする割合が高いが、北京と比較すると北京の方が「不道徳」とする割合が高い。これらは明確に人に危害を加える行動というより、野蛮 (incivility) の関連が強い行動と考えられ、本研究における行動の特徴の評定でも、「危害」の評定に関しては、「人前で大声で罵ること」は8位、「ごみのポイ捨てをすること」は10位、「道路に唾を吐くこと」は20位、「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」は17位である。Buchtel et al. (2015) が指摘したように、日本も西洋のような「危害」や「公平性」などの普遍的な概念だけではなく、儒教的背景をもつ独自の道徳観を形成していると考えられる。このような結果は、道徳的判断は普遍的な原理によってなされるのではなく、文化に影響を受けた複数の原理が存在するという Buchtel, et al. (2015) の主張を裏付ける。

Buchtel, et al. (2015) は、中国と西洋で、「不道徳」とされる行動に大きな違いがあるにもかかわらず、「道徳」という共通の概念を想定できる理由として、道徳に違反する行動は①神聖な価値を冒涇するとみなされ (Tetlock, Kristel, Elson, Green, & Lerner, 2000), ②許されるものではないと認識され (Miller, Bersoff, & Harwood, 1990), ③社会的排斥の対象になり (Wright, Cullum & Schwab, 2008), ④感情的な反応を引き

起こす (Cannon, Schnall & White, 2011; Haidt, 2007) など、同様の認知的結果を引き起こすことを挙げた。この点は、日本も同様であると考えられ、「道徳」という概念は共通であるが、この概念が指す内容は文化によって異なると想定することができる。

また、西洋では社会的規範は「危害」など普遍的な概念による道徳的規範と文脈や状況の影響を受ける慣習的規範に分類される (Turiel, 1983)。しかし、中国では「人を殺すこと」という「危害」より「道路に唾を吐くこと」などが「不道徳」と判断されていることなどから、中国の道徳的規範は西洋でいえば「慣習的規範」と考えられるものである。中国の社会的規範は西洋のような道徳的規範と慣習的規範という分類ではなく、道徳的規範と法的規範などに分類される可能性を示唆し、社会的規範の分類自体が異なる可能性を検討すべきであると主張している。本研究では、日本の道徳判断には、「危害」という概念が影響を与えていることを示唆しており、道徳的規範と慣習的規範という区別は、日本においては成立すると考えられる (e.g. 二宮, 1984)。しかし、このことは、社会的規範における他の分類を否定するものではない。

(2) 日本人大学生の道徳観の特徴について

道徳的判断に文化による影響を考えることができるのは、前述の通りである。それでは、日本文化における道徳観の特徴は、どのようなものであろうか。使用した28の行動について、「危害」「野蛮」「迷惑」「みっともない」のそれぞれの評価と、「不道徳」と判断した割合、「悪いことではない」と判断した割合との間でスピアマンの順位相関を求めた結果、「不道徳」については、すべての観点に.7以上の高い正の相関、「悪くないこと」については-.6以上の高い負の相関がみられた。日本の道徳観は「危害」「野蛮」「迷惑」「みっともない」のすべての概念が関わっていると

考えられるが、中でも「危害」は、「不道徳」に .9 以上の高い正の相関、「悪くないこと」に -.9 以上の高い負の相関を示しており、日本の道徳観に強い影響を与える概念であることが示されている。「悪くないこと」と分類された割合が 25% 以上の 5 つの行動、「遊びで多くの人とセックスすること」、「自分の行動を導く価値観を持たないこと」、「自分のために誰かを利用すること」、「利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること」、「偽善的で裏表があること」は、「危害」の平均点が低い方から 6 番以内の項目である。Buchtel et al. (2015) のデータによると、中国では、「人を殺すこと」など「危害」を与える行動が「不道徳」とされる割合が低く、中国の道徳観に「危害」の影響は低い、日本は中国とは異なり、欧米のように「危害」という普遍的な道徳概念による道徳観の影響を強く受けると考えられる。中国と日本は、同じように相互協調的的自己観を持つ文化とされ、また、儒教的思想の影響も考えられているが、中国の道徳観が主に儒教的な道徳の影響を受け、「危害」などの普遍的な概念の影響をあまり受けていないのに反して、日本の道徳観は、「危害」の視点も強い影響を与えており、西洋的な視点を取り入れられているといえる。

しかし、日本の道徳観は「危害」だけではなく、「野蛮」「迷惑」「みっともない」などの儒教的な概念の影響も受けている。Buchtel et al. (2015) では各行動を「uncivilized」と判断する程度を測定しているが、uncivilized の日本語訳が難しく、本研究では civilization の側面を「野蛮」「迷惑」「みっともない」の 3 語から評定することとした。この 3 語ともに、「不道徳」との正の相関は高く、「悪くないこと」との負の相関も高く、中国と同様、人間関係における civilization の影響を受けていると考えられる。

このような傾向は、Buchtel et al. (2015)

の西洋のデータや中国のデータと本研究のデータを比較した場合にも、同様に認められる。西洋や中国のデータと比較して、日本の方が「不道徳」と判断する割合が高い行動は、「自国の法律に背くこと」「他人の気持ちに配慮しないこと」の 2 つで、逆に、西洋・中国と比較して日本の方が不道徳する割合が低いのが、「自分のために誰かを利用すること」「浮気をする事」である。「他人の気持ちに配慮しないこと」は日本において不道徳と判断される割合が高く、「自分のために誰かを利用すること」や「浮気をする事」は不道徳と判断される割合が低い。「他人の気持ちに配慮」すれば、「自分のために誰かを利用」しないであろうし、「浮気」もしないと思われるが、本研究のデータによると、「他人の気持ちに配慮しないこと」と「自分のために誰かを利用すること」「浮気をする事」は道徳的判断が異なる。「自分のために誰かを利用する」ことは、山岸 (1998) が悪代官と悪徳商人の例で示した相互互惠的な関係に通じるのかもしれない。悪代官と悪徳商人のような関係は、現代では「全く知らないセールスマンから中古車を買うよりは、友人が紹介してくれたセールスマンから買う方が安心できる」など内集団の人間関係を利用して利益を得る内集団びいきに通じると考えられる。また、固定化した人間関係の中で、その関係を壊さない安心感が「浮気をする事」を不道徳と考えないことに通じるのかもしれない。「『本気』でなく『浮気』であればよい」ということは耳にすることがある。一方、固定化した人間関係の中では、「他人の気持ちに配慮すること」は、その人間関係を維持するために重要である。このように、これらの一見、矛盾する結果は、山岸 (1998) が指摘する人間関係が固定化した中での互惠的な関係を基盤とした「安心」の日本の特徴を表現しているかもしれない。

一方、一般に日本は西洋と比べて、法律に

よる善悪の判断ではなく、状況依存的であるといわれているが、「自国の法律に背くこと」は西洋と比較しても不道徳とする割合が高い。一般的に信じられていることとは異なり、法律を尊重する道徳観が強いといえる。

西洋と中国の間にあるのは、「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」「遊びで多くの人とセックスをすること」「親を敬わないこと」「公共の場所で大声で話したり、笑ったりすること」である。中国は、civilizationの影響を強く受けた道徳観であると Buchtel et al. (2015) は結論づけているが、日本も中国よりはその影響は低いものの、西洋と比較すると civilization の影響を受けた道徳観であるといえる。その背景には、「他人の気持ちに配慮しないこと」「親を敬わないこと」など相互協調的自己観や儒教的道徳に関連すると思われる価値観が影響していることがうかがえる。

(3) 関係流動性・文化的自己観と道徳観

関係流動性が道徳観に与える影響を検討するため、関係流動性の平均値を基準として、関係流動性高群と低群に分け、道徳判断とのクロス集計を行った。また、文化的自己観の影響を検討するため、相互独立的自己観優勢群と相互協調的自己観優勢群の間で道徳カテゴリーのクロス集計を行った。 χ^2 検定の結果、有意差が認められたのは、関係流動性との関連で8項目、文化的自己観との関連で3項目であった。有意傾向のものを含めると、関係流動性との関連が示唆される行動は10項目、文化的自己観との関連が示唆される行動は6項目であった。文化的自己観に比べて、関係流動性の方が、道徳観に与える影響が多少、幅広いことが示唆される。

関係流動性と関連があることが示唆された10項目は、「偽善的で裏表があること」「自国の法律に背くこと」「人の陰口を言うこと」「人種による偏見を持つこと」「友達を裏切る

こと」「他人の気持ちに配慮しないこと」「いじめを傍観すること」「集団で特定の人を無視すること」「無断で他人の日記を読むなどプライバシーを侵害すること」「期末試験で不正行為をすること」である。これらの項目では、関係流動性の高群は低群に比べて、これらの行動を「不道徳」と考える割合が高く、反対に「悪くないこと」と考える割合が低いことが示されている。すなわち、日本文化という同一の文化の中であるが、関係流動性を高くとらえる個人はそうでない個人に比較して、道徳的に厳格な傾向があるといえる。これは、人間関係を比較的自由に選択できる関係流動性の高い社会では、「信頼」を高く持つことによって、新たな関係形成を促すという山岸(998)の見解と一致する。すなわち、「信頼」を獲得するためには、個人はより道徳的である必要がある。中でも、「偽善的で裏表がないこと」や「人の陰口を言わないこと」など、関係流動性と関連が示唆された10項目のような側面は、信頼を獲得するために重視されるのではないかと考えられる。

一方、文化的自己観については、関連が示唆された「親を敬わないこと」「自国の法律に背くこと」「遊びで多くの人とセックスすること」「他人の持ち物を盗むこと」「他人を意図的に傷つけること」「友達を裏切ること」の6項目のうち、「親を敬わないこと」「自国の法律に背くこと」「他人を意図的に傷つけること」「友だちを裏切ること」については、相互協調的自己観優勢群は相互独立的自己観優勢群に比較して「不道徳」と判断する割合が高いことが示された。これらは、相互協調的自己観を反映する行動と思われる。

関係流動性や文化的自己観は、西洋の個人主義文化と東洋の集団主義文化(e.g., Triandis, 1995)を対比する中で生まれてきた概念である。日本など東洋は、西洋に比べて関係流動性が低く、相互独立的自己観ではなく相互協調的自己観をもつとされる。本研

究では、日本の大学生を対象とした質問紙調査により、その得点をもとに、関係流動性の高さの認識の違いや、個人の持つ文化的自己観の違いと道徳観の関連を調査したのに過ぎない。日本文化の中で大学生という同世代が対象となっているだけに、関係流動性や文化的自己観の違いは少ないと考えられる。この中で見られた関係流動性や文化的自己観と道徳観の関連について、西洋文化や中国の文化など他文化と比較した場合にまで一般化できるものであるかどうか、結果は慎重に扱わなければならない。

一方で、日本社会における変化について、考察する重要なヒントを与えているかもしれない。日本社会は変化しているといわれている。たとえば、経済のグローバル化に伴って雇用形態なども変化しており、内閣府の報告(2006)によると正規雇用者は1997年度から減少が続く一方、非正規雇用者は90年代後半から上昇を続け、2005年には雇用者のうち、約3人に一人が非正規雇用となっているという。日本型の終身雇用制度とは異なる雇用形態が広まっていることを示唆している。しかし、2017年度の雇用動向調査(厚生労働省, 2018)によると、転職入職者は性別・年齢・雇用形態による違いはあるものの、もっとも多い30代パート女性でも23.2%で、世界と比較すると低い状態である(OECD employment outlook, 1996)。ただし、その日本においても特に若者に意識の変化が表れており、「つらくても転職せず、一生一つの職場で働き続けるべき」とする18～24歳の若者は、1998～2008まで10%前後(9.6～12.5%)で微増傾向であったものが、2013年には4.8%まで低下している(労働政策研究・研修機構, 2018)。しかし、この年の調査では、新たに「できるだけ転職せず、同じ職場で働きたい」という選択肢が設けられており、31.5%を占めることから、単純に比較することはできないものの、他国と

比較して2008年までは、「つらくても転職せず、一生一つの職場で働き続けるべき」が多かったのに対し、2013年は他国と同程度か、むしろ低くなっている。このような雇用形態や意識の変化は、人間関係の流動性を高める結果となる。

一方で、Hamamura(2012)は、個人主義—集団主義の軸において、日米の文化両方で、1950年から2008年までの変化を分析している。一般的に近代化の影響でコミュニティとの関係が希薄になり、日米双方で個人主義傾向が増加すると考えられている(Kashima, Bain, Haslam, Peters, Laham, Whelan, Bastian, Loughnan, Kaufmann, & Fernando, 2009)が、さまざまなアーカイブデータを分析すると、すべての分野で個人主義化が進んでいるわけではないことが示されている。日本では社会的義務が上昇し、個人の権利の重要性が減少しているという。このように、個人主義化すると考えられている中でも、相互協調的自己観を反映した価値観は、残っている。Markus & Kitayama(1991, 2010)も、グローバル化に伴う「欧米化」が日本の価値観に与える影響は表層的であり、根底的な集団主義や相互依存性は一貫してみられると指摘している。

本研究において、関係流動性が道徳観に与える影響が相互協調性に比較して、広範にみられたことは、このような社会の変化に対応したものかもしれない。今後の研究が待たれる。

(4) まとめと今後の課題

本研究では、Buchtel et al.(2015)の追試を行い、同時に、道徳観と相互協調的自己観、関係流動性の関係を探索した。その結果、道徳概念が文化による影響を色濃く示すものであることが示された。西洋の道徳観が危害や公平性などの普遍的な概念によって規定されるのに対し、相互協調的自己観や儒教

思想の影響を受けた中国や日本の道徳観には、状況に即して徳のある行動をするという civilization という概念が影響を与えていることが考えられる。日本の場合は、西洋と同様「危害」の概念も道徳観に影響を与えており、同じ文化圏に所属すると考えられている中国との相違もみられた。また、関係流動性との関係において、山岸（1998）が指摘するような、人間関係が固定化された中では、相互利益に基づいて相手の裏切りを防止する安心の構造が道徳観に影響し、人間関係が流動的な場合は、個人の信頼が重視される道徳観を持つ可能性も示唆された。流動性が低かった日本社会が、グローバル化に伴って流動性の高い社会への変化を経験しつつある現代の日本の道徳観を考える上で、ヒントになると思われる。一方で、相互協調的自己観を背景とする価値観も残っており、今後日本はこのような変化の中で、価値観の相克を経験していくのではなかろうか。

本研究の課題として、次の4点を挙げておく。

第一に、本研究は日本の道徳観の特徴の考察を試みているが、文化比較については、直接的なデータに基づいていないということが挙げられる。各行動の道徳カテゴリーへの分類について、中国、西洋のデータは Buchtel et al. (2015) からの引用であり、本研究で測定しているわけではなく、限界がある。また、関係流動性、文化的自己観についても、測定しているのは、日本人大学生のみであり、この関係が他の文化の中でも見られるものか、今後の研究が待たれる。

第二の限界としては、訳の問題がある。日本語の「不道徳」は immoral の概念と一致しているのであろうか。Buchtel et al. (2015) は、不道徳とされる典型的な行動の調査には、言葉の問題を解決することが重要であると指摘している。immoral の訳として、適切な中国語を選択するために、辞

書の検討や公的文書による検討だけでなく、immoral の中国語訳について 87 名のバイリンガルに質問紙調査を行っている。日本語でも「不道徳」という訳以外に、「道義違反」、「倫理違反」、「非道」、「不品行」などが考えられるが、本研究では十分な検討せずに「不道徳」という言葉を使用している。この点に関してさらなる検討が必要と思われる。

また、中国の道徳観の基礎となっているとされる civilization は、日本語に訳しにくい概念である。本研究では、civilization の側面を3つに分け、「野蛮」、「迷惑」、「みっともない」の3語を使用した。civilization は、儒教的道徳観を反映した概念とされ、重要な概念である。今後、この概念や訳についても、儒教の日本での展開などを視野に入れ、十分に検討する必要がある。

第三に、本研究では、日本における道徳性の概念を探るために、Buchtel et al. (2015) にならい、各行動を「不道徳」「悪いことではあるが、不道徳というわけではない」「悪いことではない」の3つに分類させた。この分類では、「悪いこと」は「不道徳」の上位概念となっている。これは、社会的規範として道徳だけでなく、慣習なども含めるという立場 (Turiel, 1993) と一致した考えである。しかし、Buchtel et al. (2015) が指摘するように、中国では道徳規範と法的規範の2つの分類を考えることができるように、社会的規範の分類についても、文化の影響を考えることができる。「不道徳」が「悪いこと」の上位概念である可能性はないのであろうか。たとえば、日本において「不道徳」という判断が少なかった「自分の行動を導く価値観を持たないこと」などは、「悪いことではないが、不道徳である」という分類であってもおかしくない。実際に調査に参加した調査対象者からも、そのような内省が聞かれた。このような可能性についても、今後、検討していく必要がある。

最後に、評定対象とした行動についてである。本研究では、Buchtel et al. (2015) が使用した 26 の行動に、日本で道徳と関連付けて考えることが多いじめに関する 2 つの行動を加えた 28 の行動を評定の対象とした。Buchtel et al. (2015) は、西洋文化と中国文化を背景とする大学生に「不道徳」と考えら

れる行動の自由記述を求めるところから行動を収集しているが、この中に、日本文化は含まれていない。日本に独特の道徳観を反映する行動があったとしても、本研究では含まれていないことになる。この点についても、今後の検討課題である。

(注)

- 1) 本研究の一部は、日本応用心理学会第 86 回大会 (2019) で発表された。
- 2) 食後の時間・空腹の程度・心を落ち着かせる食べ物についての質問は、伊坂裕子

(2019). 癒しとしての食—感情的摂食と道徳観への影響— 日本大学国際関係学部生活科学研究報告のデータの一部として使用された。

(引用文献)

(英文文献)

- Ardila-Rey, A., & Killen, M. (2001). Middle class Colombian children's evaluations of personal, moral, and social-conventional interactions in the classroom. *International Journal of Behavioral Development, 25* (3), 246-255.
- Buchtel, E. E., Guan, Y., Peng, Q., Su, Y., Sang, B., Chen, S. X., & Bond, M. H. (2015). Immorality east and west: Are immoral behaviors especially harmful, or especially uncivilized? *Personality and Social Psychology Bulletin, 41* (10), 1382-1394.
- Cannon, P. R., Schnall, S., & White, M. (2011). Transgressions and expressions: Affective facial muscle activity predicts moral judgments. *Social Psychological and Personality Science, 2* (3), 325-331.
- Chiu, C.-y., Dweck, C. S., Tong, J. Y.-y., & Fu, J. H.-y. (1997). Implicit theories and conceptions of morality. *Journal of Personality and Social Psychology, 73* (5), 923-940.
- Chomsky, N. (2006). *Language and Mind*. 3rd. ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fiske, A. P., & Tetlock, P. E. (1997). Taboo trade-offs: Reactions to transactions that transgress the spheres of justice. *Political Psychology, 18* (2), 255-297
- Gilligan, C. (1982). New maps of development: New visions of maturity. *American Journal of Orthopsychiatry, 52* (2), 199-212.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review, 108* (4), 814-834
- Haidt, J. (2007). The new synthesis in moral psychology. *Science, 316* (5827), 998-1002.
- Haidt, J., & Baron, J. (1996). Social roles and the moral judgement of acts and omissions. *European Journal of Social Psychology, 26* (2), 201-218.
- Haidt, J., Koller, S. H., & Dias, M. G. (1993). Affect, culture, and morality, or is it wrong to eat your

- dog? *Journal of Personality and Social Psychology*, 65 (4), 613-628.
- Hamamura, T. (2012). Are cultures becoming individualistic? A cross-temporal comparison of individualism-collectivism in the United States and Japan. *Personality and Social Psychology Review*, 16 (1), 3-24.
- Hausser, M. (2006). *Moral minds: How nature designed our universal sense of right and wrong*. Ecco/HarperCollins Publishers
- Hausser, M., Cushman, F., Young, L., Jin, R. K.-X., & Mikhail, J. (2007). A Dissociation Between Moral Judgments and Justifications. *Mind & Language*, 22 (1), 1-21
- Kashima, Y., Bain, P., Haslam, N., Peters, K., Laham, S., Whelan, J., Bastian, B., Loughnan, S., Kaufmann, L., & Fernando, J. (2009). Folk theory of social change. *Asian Journal of Social Psychology*, 12 (4), 227-246.
- Kohlberg, L. (1971). Stages of moral development as a basis for moral education. In C. M. Beck, B. S. Crittenden, & E. V. Sullivan (Eds.), *Moral education: Interdisciplinary approaches*. Toronto: University of Toronto Press.
- (コールバーグ, L. 岩佐信道 (訳) (1987). 道徳性の発達と道徳教育 駒澤大学出版会)
- Lee, K., Cameron, C. A., Xu, F., Fu, G., & Board, J. (1997). Chinese and Canadian children's evaluations of lying and truth telling: Similarities and differences in the context of pro- and antisocial behaviors. *Child Development*, 68, 924-934.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98 (2), 224-253.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (2010). Cultures and selves: A cycle of mutual constitution. *Perspectives on Psychological Science*, 5 (4), 420-430.
- Mikhail, J. (2007). Universal moral grammar: Theory, evidence and the future. *Trends in Cognitive Sciences*, 11 (4), 143-152.
- Miller, J. G., Bersoff, D. M., & Harwood, R. L. (1990). Perceptions of social responsibilities in India and in the United States: Moral imperatives or personal decisions? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58 (1), 33-47.
- OECD (1996), *Employment outlook*.
- Piaget, J. (1932). *Le jugement moral chez l'enfant*. (大伴 茂 (訳) (1977). 児童道徳判断の発達 臨床児童心理学 同文書院)
- Rai, T. S., & Fiske, A. P. (2011). Moral psychology is relationship regulation: Moral motives for unity, hierarchy, equality, and proportionality. *Psychological Review*, 118 (1), 57-75.
- Sachdeva, S., Singh, P., & Medin, D. (2011). Culture and the quest for universal principles in moral reasoning. *International Journal of Psychology*, 46 (3), 161-176.
- Snarey, J. R. (1985a). Cross-cultural universality of social-moral development: A critical review of Kohlbergian research. *Psychological Bulletin*, 97 (2), 202-232.
- Snarey, J. R. (1985b). "Cross-cultural universality of social-moral development: A critical review of Kohlbergian research" : Correction to Snarey. *Psychological Bulletin*, 97 (3), 411.
- Tetlock, P. E., Kristel, O. V., Elson, S. B., Green, M. C., & Lerner, J. S. (2000). The psychology of the unthinkable: Taboo trade-offs, forbidden base rates, and heretical counterfactuals. *Journal of*

Personality and Social Psychology, 78 (5), 853-870.

Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Westview Press.

(トリアンディス, H.C. 神山貴弥・藤原武弘(編訳)(2002). 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)

Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and Convention*. Cambridge, UK: Cambridge University Press

Turiel, E. (1998). The development of morality. In W. Damon & N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Social, emotional, and personality development* (p. 863-932). John Wiley & Sons Inc.

Wright, J. C., Cullum, J., & Schwab, N. (2008). The cognitive and affective dimensions of moral conviction: Implications for attitudinal and behavioral measures of interpersonal tolerance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34 (11), 1461-1476.

Yuki, M, Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. Center for Experimental Research in Social Sciences Working Paper Series Hokkaido University No. 75.

(邦文文献)

有光興記・藤澤文(編)(2015). モラルの心理学—理論・研究・道徳教育の実践— 北大路書房

厚生労働省(2018). 平成29年雇用状況調査の概況

内閣府(2006). 平成18年度 年次経済財政報告 —成長状態が復元し、新たな成長を目指す日本経済—

二宮克美(1984). 道徳的判断の発達 児童心理学の進歩, 73-100. 金子書房

高田 利武・大本 美千恵・清家 美紀(1996). 相互独立的—相互協調的的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要(24), 157-173.

労働政策研究・研修機構(2018). データブック国際労働比較

山岸俊男(1998). 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム— 東京大学出版会

山岸俊男(2014). 文化を実験する 社会行動の文化・制度的基盤 勁草書房

(Abstract)

The importance of including cultural perspectives in the study of moral cognition has become apparent in recent years. The present study is to replicate Buchtel et al. (2015) in which Chinese layperson's conceptualizations of morality was shown different from the Western's. They used layperson-generated examples to be categorized "immoral", "wrong, but immoral is not best word" or "not wrong at all". In the present study, in addition to their procedure, "the scale for independent and interdependent construal of self" and "relational mobility scale" were administered to Japanese University students. Results showed that it is possible Japanese conception of morality was influenced by Confucianism and interdependent construal of self as Chinese shown in Buchtel et al. (2015). In addition, people who see high relational mobility in Japanese society have higher moral standards than those who don't. More research into cultural influences on lay concepts of morality is needed.

付表1 関係流動性 (Yuki 他, 2007) の項目

「あなたの身近な社会 (学校、職場、住んでいる町、近隣など) に住む人々についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、あなたの周りの人々にどれくらい当てはまるかを答えてください。(回答は、「まったくそう思わない」～「とてもそう思う」の6段階)

- 1 彼ら (あなたの周囲の人たち) には、人々と知り合いになる機会がたくさんある
- 2 彼らは、初対面の人と会話を交わすことがよくある
- 3 彼らは、ふだんどんな人たちと付き合うかを、自分で選ぶことができる
- 4 彼らには、新しい友人を見つける機会があまりない
- 5 彼らにとって見知らぬ人と会話することはそうあることではない
- 6 もし現在所属している集団が気に入らなければ、彼らは新しい集団に移っていくだろう
- 7 彼らにとって、付き合う相手を自由に選べないことはよくある
- 8 彼らが新しい人たちと出会うのは簡単なことだ
- 9 たとえ所属する集団に満足していなかったとしても、彼らはたいていそこに居続けることになる
- 10 彼らはどの集団や組織に所属するかを自分で選ぶことができる
- 11 たとえ現在の対人関係に満足していなくても、彼らはそこに留まり続けるしかないことがよくある
- 12 たとえ現在所属する集団から離れたいと思っても、彼らはそこに留まらざるを得ないことがよくある

※ 項目 4, 5, 7, 11, 12 は逆転項目

付表2 相互独立的一相互協調的自己観尺度 (高田他, 1996) の項目

次の各項目について、自分自身にどの程度あてはまるかお答えください。(回答は、「まったくあてはまらない」～「ぴったりあてはまる」の7段階)

- 1 常に自分自身の意見を持つようにしている
- 2 人が自分をどう思っているかを気にする
- 3 一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う
- 4 何か行動するとき、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある
- 5 自分でいいと思うのなら、他の人が自分の考えを何と思うと気にしない
- 6 相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる
- 7 自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じるところを守り通す
- 8 他人と接するとき、自分と相手のとの間の関係や地位が気になる
- 9 たいていは自分一人で物事の決断をする
- 10 仲間の中で輪を維持することは大切だと思う
- 11 良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まると思う
- 12 人から好かれることは自分にとって大切である
- 13 自分がなにをしたいのか常に分かっている
- 14 自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる
- 15 自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない
- 16 自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける
- 17 自分の意見をいつもはっきり言う
- 18 人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い
- 19 いつも自信をもって発言し、行動している
- 20 相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある

※ 奇数項目は相互独立的自己観、偶数項目は相互協調的自己観を測定する。